九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国におけるシビックプライド醸成のための国際スポーツイベントのデザイン方法

張，毅

https://doi.org/10.15017/1928633

出版情報：九州大学，2017，博士（芸術工学），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏　　名　：　張　毅

論 文 名　：　中国におけるシビックプライド醸成のための国際スポーツイベントのデザイン方法

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

シビックプライドは、イギリスが 18 世紀大規模な都市化を経験した際に発生した概念である。自治による公民社会から成り立ち、自治の感覚に基づくプライドは都市形成の本質といわれる。1970 年代以降、イギリスの都市はインフラの老朽化、経済の低迷の時期、人口や企業の流出など問題の中シビックプライドの概念は 1998 年ブレア政権が発表した「アーバン・ルネサンスに向けて」という「提言書」に再び新たな都市再生・社会再生と共にもたられた。「提言書」では「わたしたちのまちには多くの誇るべきものがある」、都市再生は何よりもまず「人」のためであると謳われ、「シビックプライドに根ざした市民の行動が現代の都市再生の中心にある」と述べた。イギリスの都市は多くの誇るべきものをシンボル化し、シティプロモーション活動は欧米の多数の国々に展開された。

シビックプライド醸成のシティプロモーション活動の先行研究としてオリンピックの事例調査を行った。オリンピック開催する際には「世界の 200 以上の国・地域から選手や大会関係者が参加するほか、多数の観客が開催都市を訪れる。さらに、テレビ配信等を通じて約 48 億人が観戦すると言われており、世界中の人々に開催都市及び国の魅力を伝える絶好の機会となる」。また、開催期間中に人々を集め、コミュニティを構築する社会再生の機会でもある。1992 年バルセロナオリンピックは都市再生の際に開催し都市の魅力を世界中に伝え、市民の福祉のための都市建設、市民の参画意識を呼び起こし、開催を機にシビックプライドを醸成する可能性を示した。しかし、2004 年アテネオリンピックの開催では、アテネが古代オリンピックの発祥の地であり、近代オリンピック 1896 年第 1 回の開催地であるため、108 年後にオリンピックの故郷に戻ったという誇りがある一方で、新しい空港や地下鉄、競技場などの大規模なインフラ整備が現在まで国民の経済負担となっている。どのように国際スポーツイベントを開催することで、国民のプライド感を持ち上げられるか、そして開催都市の持続発展に結びつくかの課題が残る。

一方、シビックプライドは、中国語での直訳の概念表現はないが、「シビック」は「公民」に通訳され、法律の意味では、中華人民共和国国籍を持つ人が「中国公民」と呼ばれている。小中学校や大学教育体系にある「公民教育」と「公民資質」、「愛国教育」で頻繁に現れる。「プライド」では、中国語の意味に近い「誇り」であるため、「シビック」と「プライド」とつなぐ「シビックプライド」という概念は、「中国公民の誇り」「中国公民としての誇り」「中国に対する公民の誇り」という理解が考えられる。「シビックプライド」は上記のようにイギリス大規模な都市化を経験した際に発生し、都市再生に向けた際に再び提唱した概念である。本研究において 1998 年から中国の大規模な都市化を経験する背景はイギリスと共通で、都市再生や社会再生とは、何によりもまず「人」のためであるとの認識は、欧米や中国でも認められている。つまり、欧米ではインフラの老朽化、経済低迷、テロ、老齢化、少子化という点で、中国では都市化の経済高速発展と伴い多くの外来人口が都市に入り都市の中心から郊外への発展、また市民階級の貧富差の不安、市民資質が向上すべきなどの都

市再生は、社会再生に向けた市民のための安心安全な都市で活力がある都市づくりが、市民や行政が望んでいることである。そのため、本研究は都市再生、社会再生の視点から、「シビックプライド」の概念を「都市に対する市民の誇り」と規定し、都市と市民の関係に位置づけと考察する。

1980 年からの中国改革開放の政策につき中国が高速発展と共に、多くの地域が都市化に入り都市間の競争が強くなり、その行政は、他都市と違ったアイデンティティを発見しようとして、都市として自慢できるモニュメントや、偉人や、名物や、産業や、観光資源などが、都市のプライドとしてつくりあげられた。またこのような自慢の中の一つである 2008 年北京オリンピックの開催成功により、国が強くなり、国の独自の文化性（文化の自信）を世界舞台に伝え、で中央政府が大型イベントをコントロールできるという自信もアピールした。その後、国際スポーツイベントの招致開催により、開催都市の都市プロモーションとして、中国で多数の国際イベントが盛えた。また、国際スポーツイベントは開催都市の地方政府が開催のための競技場などインフラ建設、国際的レベルのホスピタリティを向上する機会として、イベントに向け都市の魅力や新た都市イメージを来訪者や市民に伝える機会として考えられていた。しかし、国際スポーツイベントはあくまで短時間の開催であり、2004 年アテネオリンピックのように開催前では大会に際して建設された新しい空港が 2004 年のヨーロッパ最優秀空港など数々の賞を受賞しても、開催後の財政負担は国民に喜ばれないものであった。

また、オリンピックは主に国の意志を表す中央政府がコントロールしながら開催都市が主催する大会であり、本研究におけるシビックプライドの概念である都市と市民の関係性において、開催都市の地方政府（官）と市民（民）に関わる都市プロモーションとして着目して研究を行う。そのため、2008 年北京オリンピックの以後に行われた、都市再生・社会再生を目指した中国広州市政府が主催運営し、省と国の協力で開催する 2010 年広州アジアスポーツ競技大会（以下は広州大会に略）の例をあげる。

本研究は、欧米「自治」の公民社会と違った中国の地方政府（官）が主導する国際スポーツイベントにおけるシビックプライド醸成のために、開催地アイデンティティのイメージ形成と市民意識行動の形成に果たす役割と効果について考察し、その計画・設計時点でのデザイン方法を導くことを目指している。広州大会開催の５年前の準備段階のデザイン方法を考察し、「官」がどのように都市の魅力を「民」に伝え、都市化の最初段階の都市インフラ建設の現状からどのように「民」のために新たな都市のアイデンティティイメージを創り上げるかについて検討する。そして、より多くの「民」が大会に関心をもち、応援、体験するまでの意識行動についてのしくみづくりを考察し、開催５年後の役割と効果を検討する。最終的には、次の５年及び未来における開催地のシビックプライド醸成のため、「官・民」共創型の都市プロモーションのデザイン方法を探求することが研究目的である。

これにより、今後シビックプライド醸成のための国際スポーツイベントの開催企画、そして計画・施策（デザイン）の一助にしようとするものである。